

P9-225

NCS (nerve conduction study) が有用であった正中神経不全麻痺の1症例

山田赤十字病院 臨床検査部

○森本 一至

【はじめに】一般的に正中神経障害と言えば、手関節部での絞扼障害、いわゆる手根管症候群 (CTS) が多いと考えられる。今回、NCSにおいてCTSとの鑑別を行えた、正中神経不全麻痺の1症例について報告する。

【症例】51歳、男性 既往歴：23歳虫垂炎 家族歴：特記事項なし (現病歴) 平成19年2月頃より特に誘因も無く、右手指に違和感が出現した。その後、次第に物が掴みにくくなり、近医に受診し精査目的で当院、整形外科に紹介となる。右母指球筋の萎縮を認め、右母指球筋の外転筋と対立筋障害があり、虫様筋の萎縮 (±)、感覚障害は明らかではなかった。臨床症状から右CTSを疑い、NCSを施行した。その結果、右CTSは否定的であり、右正中神経の運動神経障害 (感覚神経は正常)、特に右母指外転筋 (母指球筋) の局在性障害が考えられた。一方、右手関節MRI検査では、右手根管付近に明らかな異常を認めなかった。また、脳MRI検査でも右上下肢筋力低下の責任病変は指摘できなかった。以上により、保存的療法にて経過観察を続けたが、回復傾向は認められず筋生検も同時に施行する目的にて手術を施行した。術中所見では、右母指球筋枝と浅掌動脈弓が隣接し、拍動による神経への絞扼性障害を認め、右母指球筋萎縮および右正中神経不全麻痺と診断した。術後については、順調な回復を認めている。

【まとめ】今回、NCSが臨床診断に役立つ正中神経不全麻痺の1症例について報告した。最近の神経障害検索には、MRIや超音波検査などが行われつつある。しかし、現段階ではNCSに優る検査とは言い難いと思われる。従って、NCS技術をスキルアップすることで、より一層臨床診断に役立つ検査結果を提供する事が可能であると推察された。

P9-226

当院におけるHIVスクリーニング検査について

芳賀赤十字病院 検査部

○菅野 佳之、沼尻 勝彦、葛西 俊二

【はじめに】当院では1994年より16年間、感染予防の見地、手術適応の厳密化等の目的から術前者及び妊婦を対象としてHIVスクリーニング検査を実施している。これまでに、使用する機器の変更と共に検査法の変更があり、2006年まではEIA法を、2007年以降はCLIA法を行ってきた。検査結果が陽性と判定された場合は全件の結果を臨床へ報告し、確認試験等を実施した結果から診断が行われている。

今回、過去16年間に行ったHIVスクリーニング検査結果を集計し、検査数の推移や陽性、偽陽性例の特徴を調査し、陽性、偽陽性例への対応を検討したので報告する。

【方法】過去16年間に当院で行ってきたHIVスクリーニング検査結果のうちカットオフ値を上回った陽性例を抽出し、集計検討を行った。

【結果】16年間の検査依頼件数は一時期を除いて年々増加が見られた。このうち、スクリーニング検査結果が陽性で確認試験の結果が陰性である、スクリーニング検査偽陽性率はEIA法で0.025%、CLIA法で0.287%であった。陽性件数に占める偽陽性率はEIA法で46.2%、CLIA法で91.3%と差が見られた。

【まとめ】過去16年の間にHIVスクリーニング検査件数は増加してきたが、偽陽性率にも増加が見られた。患者様への結果の説明の際に、HIVスクリーニング検査陽性即ち感染、というHIVスクリーニング検査偽陽性の誤認識による困惑を防ぐ為に、当院で作成した陽性、偽陽性時の為のフローチャートに則って対応し、偽陽性結果により混乱を招くことが無いよう検査部から偽陽性について警鐘を鳴らし、注意を喚起していきたい。

P9-227

超音波カラードプラ法が診断に有用であった腎梗塞の1例

名古屋第一赤十字病院 検査部¹⁾、名古屋第一赤十字病院一般消化器外科²⁾

○山森 雅大¹⁾、湯浅 典博¹⁾、山岸 宏江¹⁾、阿智破 智¹⁾、佐藤 幸恵¹⁾、岡田 好美¹⁾、小島 祐毅¹⁾、横井 剛²⁾

腎梗塞は腎動脈系に血栓や塞栓が詰まり、その支配領域に局限して壊死が起こる疾患である。本症は稀な疾患であるため、腹痛の精査の目的で超音波検査を行う場合、頻度の高い尿路結石や胆石、消化管疾患などに注意が向きやすく正しく診断できないことがある。今回、カラードプラ法を用いた超音波検査が診断に有用であった本症の1例を経験したので報告する。

症例は76歳の男性。突然の右側腹部痛を主訴に当院を受診した。血液生化学検査で腎機能低下を認めたため、造影剤の使用を避け単純CT、腹部単純X線写真にて原因の検索を行ったが診断には至らなかった。消化管疾患を疑って入院し、保存的治療を行ったが症状の改善がみられないため、十分な輸液を行いつつ造影Multidetector-row CT、超音波検査を行った。超音波Bモード法では側腹部痛の原因となる所見を認めなかった。造影CTでは右腎実質に造影不良域を認め腎梗塞を疑った。翌日、腎血流を評価するため行った超音波カラードプラ法では、右腎の血流シグナルが左腎に比べ著しく低下し、右腎下半に血流シグナルの欠損を認めた。以上の所見より腎梗塞と診断した。

腎機能低下のため造影CTが躊躇される場合、単純CTでは腎梗塞の診断は困難である。超音波Bモード法でも同様である。腹痛の鑑別診断に腎梗塞を考慮に入れて、カラードプラ法を用いた超音波検査を行うことが重要である。

P9-228

当院における皮膚科超音波検査について

庄原赤十字病院 医療技術部 検査技術課 生理検査室¹⁾、庄原赤十字病院 皮膚科²⁾

○瀬戸 学¹⁾、表 文恵¹⁾、大原 直樹²⁾

【目的】皮膚科診療に超音波検査を活用した約2年間の検査目的及び結果を集計し、超音波検査の有用性を考察したので報告する。

【対象】2007年6月～2009年3月までに皮膚科を受診し超音波検査を施行した160例

【方法】使用機器は、東芝社製アプリオ、エクサリオ。プローブは、7.5MHzまたは10MHzのリニアを用いた。対象部位を走査し、必要に応じてドップラーにて血流を評価した。

【結果】検査目的は、皮下腫瘍精査146例、腫瘍浸潤度評価6例、皮下異物評価5例、皮膚腫脹精査3例であった。臨床的、病理組織学的に診断された160例の内訳は、粉瘤39例、脂肪腫16例、毛包炎12例、炎症12例、血腫11例、ガングリオン8例、リンパ節8例、異物4例、その他50例であった。腫瘍の鑑別の補助としての血流の評価では、粉瘤39例中7例に血流を認めた。リンパ節は、全例血流を認め、ガングリオンでは全例に血流を認めなかった。

【考察】脂肪腫、ガングリオン、リンパ節では、特徴的な画像と血流の有無により診断は、有用であった。粉瘤は、通常血流は認めないが、7例に血流を認めた。血管が腫瘍を超える場合や炎症を伴い周囲組織の血流増加によるものと考えられた。また、粉瘤様の画像で血流を認める1例に小結節汗腺腫、血流を認めない2例にエクリン螺旋腺腫、アポクリン系腫瘍があり、診断に難渋した。皮下異物では、ガラス片や小石など明瞭に描出でき、異物が無いことの証明も可能であった。皮下の炎症、基底細胞癌の浸潤度、深さなどを評価できることは、その後の手術に有用であった。

【結語】皮膚科での超音波検査は有用であるが、上皮的皮膚腫瘍の診断には注意が必要である。